

ビブリア

No. 3

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 団書委員会
昭和46年11月2日

前号までで各科の先生方から各教科の入門的な読書案内をしていただいたので、今号からは各先生方の専門の分野を中心に読書案内をお願いした。今号は機械科・電気科であるが、次号は化学科・土木科の予定である。なお今後とりあげて欲しい分野があれば遠慮なく申出て欲しい。

鬼頭史城著

“渦”について

機械工学科 中山淳一

私達の生活に欠くことのできない「水」とか「空気」とかは、紀元前の昔から研究し続けられ今日に至っている。特に近年における進歩はめざましい。当然のことながら、こうした進歩によって私達は直接、間接その恩恵に浴しているわけであるが、いざその事例をあげようとするとなかなか適切な事例は見当たらないものである。

この本は水や空気の流れの中に生ずる渦のいろいろな問題について、水力機械の技術者の立場から、すなわち技術問題としての渦の話を誰が読んでも面白く、実に判り易く書かれている。(高学年の諸君は問題の背後にある理論にまで思いをいたすならば流体力学の副読本にもなると思う。)

内容は、第1章 渦のいろいろ、第2章 渦の害とその対策、第3章 やさしい流体力学の三章からなっている。このうち、第2章の「渦の害とその対策」に書かれていることを二・三紹介しよう。

まず、架空送電線に風が当たって渦が生じ、それが共振現象を起こして振動し、遂には断線する。このような事故を防ぐにはどういう方法があるか。というような極めて興味のある話である。

また、その昔著者が海軍技術研究所に勤務していた時に当面した「船のプロペラの鳴音」の話がある。当時「伊72号」という日本海軍御自慢の潜水艦が航行中、実によい音色と強い音を出した。潜水艦に限らず船が音を発すれば、敵の船の水中聴音器にキャッチされ、攻撃をうけることになるから重大である。軍艦ばかりでなく商船の場合でも、不快感を与える音は、いわゆる騒音として防止しなければならないが、戦時中のこと故、人命(勝敗)にかかる深刻な問題である。

さて、この音の発生原因は渦であった。それを苦心の末解決し、現在の船のプロペラはこの時の研究成果が実用化されているとのこと。

また、昭和20年のはじめ頃、多大の期待をかけられて竣工した高速潜水艦が水中を航走するとき非常に大きな音を発した。ことに6層間位の司令塔の内部はものすごい音で話も全く聞きとれない程であった。このような大きな音を出したのでは、潜水艦の隠密性が失なわれ使いものにならない。これも丸棒に水流が当って生ずる渦のいたずらであることをつきとめ見事に解決した話。などなど、実にユーモラスに書かれている。

なお、同じ著者の「キャビテーションの話」(オーム文庫)もお読みになるようおすすめしたい。

(価格は 渦: 470円 コロナ社
キャビテーションの話: 300円)

「原子力発電技術読本」

を読んで

電気工学科 合志一夫

原子力工学は三年前までは日本原子力研究所の原子炉研究所の先生に講義を非常勤講師として御願いしてあったが、その後は私が担当することになった。

電気工学の後期週2時間で成果をあげるには良い教科書が必要であった。丁度その年の4月に「原子力発電技術読本」がオーム社から出版されたので読んで見ると私の考えと一致したのでこの本を採用することにした。専門の本を選ぶときの参考になればと思ってその経過を述べて見たい。

科学の先端を行く原子力の技術を専門家としてなく、電気の専門家として原子力を知っておかぬと10年~20年後には困るのではないか、といつても現在大学で電気工学科と並んで原子力工学科をつくっている内容のものを高専で30時間程度で一応話が理解できる程度に習得することは相当難問題である。従って大学の先生の著書では望み薄、一般産業界の技術者は本を書

く余裕はない。学会か、日本原子力産業会議の委員会等でPRも兼ねて出版すれば広い範囲の専門家（技術者）が分担するので良い本となるのではないかと心ひそかに望んでいた。

産業界（電力会社）がその必要性を最も強く感じていたので、電力会社の技術者約20名が分担して250頁の本にまとめて出版されたのがこれから紹介する技術読本であって、原子力工学という本ではなく技術を主にした内容の正に私の望む本であった。

原子力工学は理学、工学の全般にわたる広範な学問的基礎の上になりたつ総合的な工学である。技術者がそれぞれの専門の立場から原子力工学の分野に寄与するためには、専門の工学に対し充分な基礎知識をもつていることのほかに、原子力全般のことを理解していくことが必要である。従って電気工学科の学生としては原子力工学の高度の理論を習得するよりも、その数学や、大形科学用電子計算機を使用する研究や、設計の結果を理解して技術面に応用することに重点を置くべきであると考えられる。

この本の執筆者は何れも原子力発電の実際の専門技術者ばかりで、担当部門の第一人者である。

このことは同一内容の説明でも技術者の立場から、現場の経験から、これから原子力を取り組む後輩に対して理解し易いように書かれているので、技術者を目指す高専生にとっては最適の本と考えられる。

従ってこの本を読むに当って、その内容を知識として取り入れるだけでなく、新しい工業、高度の工学技術、新しい開発技術に取り組む技術者の心構えのごときものを体得するよう心掛けるべきである。

内容は14章に分かれ原子力発電に関する全項目が要領よくまとめてある。

原子炉の理論は、核物理学から炉の構成、原子炉理論、原子炉動特性、設計の要点まで書いてある。

核燃料については資源、燃料サイクル、加工、その他原子炉に特有の材料に関しては、今までの材料工学では取り扱ったことのない中性子の挙動について述べてある。

また安全関係、放射線防護等公害対策の実状、現在建設中または計画中の各種原子炉について、各々制御運転等実際面の特長が比較検討されている。

なお近い将来の原子炉として、高速増殖炉にまで言及している。

電力会社の技術者向としては発電所の計画、建設、運転、保守の実際面まで触れている。

放射線関係は防護のみで利用については原子力発電ということで割愛されている。

使用済み燃料の再処理、放射性廃棄物の問題は発電所の建設が進むにつれ最も重要な課題で、国策の一つとして早く方針を決定すべき問題であるが、この点は主として化学の問題であるので電気技術者向の読本として編集されたのであまり触れていない。

放射線利用については本校では電気応用の科目の中で触れている。

わが国は資源に恵まれずエネルギー源として、石油の輸入、原子力発電としてウランの輸入に存在せねばならぬ運命にあるが、核融合炉が開発され、海に閉まれたわが国では、海水から重水をとり燃料として使用する時代は今後少なくとも20年以後となると思われる。私の時代には到底エネルギー自立はできないが学生諸君の時代に核融合炉が実用化される可能性があるので、この夢の実現に一役買う青年は本校にはいないだろうか。

—友と語る— 文学のひろば —

時空を超えて存在するような優れた文学作品に対しては、抱く感概も各人各様のものがあって興味深い。作者の意図するところはひとつであっても、読み手の読解力や視点を異にすることによって様々な見解が生まれるのである。ここに掲げる読書感想文は、夏休みの国語科の課題の中から。

まとまりがあってかつそうした見解の差異で今後論争に発展しそうなものを選んでみた。次号以下、論争の形式を続けていきたいので読者諸氏の投稿を期待している。なお原稿は国語科生田のもとまでお届け願いたい。

「狭き門」を読んで

佐々木 秀明

この物語では、信仰と愛と恋が中心になっている。

愛というものは、信仰にも恋にもある。恋の愛というのは、いつも愛した人のそばにいて、なんでもしてや

りたい。その人と共に喜び、共に苦しみたいという直接的な愛で、信仰の愛は、自分の恋を退け、その人の将来のために信仰を通して自分の愛を全うするという間接的な愛である。前者の恋の愛というのは、ごく普通の愛の表現のしかたで、ジェロームの方である。後者の信仰を通しての愛というのは、アリサの自分の恋を犠牲にしてジェロームを主に近づけようとしたもの

である。しかし、ジェロームが主に近づくために、なぜアリサが障害になるのだろう。たとえジェロームがアリサと結ばれても、彼が主に近づけないとはかぎらないと思う。アリサはジェロームを助け、主に近づかせることもできるのではないか。ジェロームもそれを望み、アリサも最初はそれを望んでいた。そしてそうなることが最も自然でふたりにとって最も幸福なことだと思う。

信仰とはそんなに強いものなのだろうか。自分の恋を貰くよりも主に近づく方がだいじなことなのだろうか。愛は死よりも強いという。仮にここに自分の愛している人が危険にさらされているとしよう。もし自分がほんとうにその人を愛しているならば、その人を放っておくはずがない。自分の命を投げ出してでもその人を救うだろう。それだけ愛は強いものなのだと思う。死は神聖なものだが、その神聖とは、やはり信仰からきていると思う。その死に愛が勝つというのだから愛は信仰よりも強いのではないだろうか。

直接相手にぶつける愛と遠くからその人を見守る愛。愛の表現のしかたは人によって違うだろう。少なくともぼくは、ジェロームのように直接表現したい。その人がそれでよければ。ジェロームも主から少しくらい離れていても、アリサと結ばれるのならかまわないに違いない。そして、主に少しでも近づこうと努力するだろう。そう、たとえそれにはほど遠くとも、それに近づこうとする努力、その努力こそ、その主に一歩近づいたことになるのではないだろうか。

アリサはジェロームのために恋を犠牲にしたが、もし彼が主に近づかないまま死んでしまったら、アリサの犠牲はむだになってしまったのではないだろうか。今の時代だったら事故、災害など、そうなる危険がたくさんある。少しオーバーかもしれないが、人間皆あすをも知れぬ命かも知れない。それは先を見通すこともないせつである。しかし、先のことばかり考えて今をつかみそこねては、先などもとうていつかめるはずがない。自分の気持ちを素直に持って今を精一杯生きることが、先を作るもとになるのだと思う。

アリサは、人間は幸福のために作られていないという考えをもっている。アリサとジェロームは離れた所に住んでいたので文通をしていた。しかし、彼女は幸福になり過ぎるのを恐れて、唯一の楽しみであった文通もやめてしまい、彼に会うことも恐れた。しかし、人間が幸福を望まなくなったらこの世の中はどうなるだろう。苦しみだけがうずを巻いて、歌の文句ではないが右も左も真っ暗やみになってしまうに違いない。人間は幸福を求め、努力すべきである。幸福があるからこそ毎日を楽しく生きることができるのだ。

とにかくこの世がアリサのような、恋も捨て幸福をも望まない人間ばかりになったら、おもしろくない世

の中になってしまう。そんな世の中になってしまふくない。

「狭き門」

「狭き門」。
この物語を読
んだ時、ある

佐藤重勝

人は、ジェロ

ームとアリサの愛に疑問を感じ、彼らにとって、結ばれることが最も自然で幸福なことだと考えるかもしれない。それは、おそらく正当な考え方であろう。しかし、アリサの立場から考えてみると、決してそうとばかりは言えないような気がする。確かに、その場限りの幸福に酔うことを望み結ばれようとするならば、それは、彼らにとって容易なことだったにちがいない。が、それはあくまでも第三者的な傍観的な立場での感想であって、アリサが本心からそう考えたとは思えない。実際、彼女の日記を見ると、次のようなことが書かれている。

私は彼の妨げになっている。彼が、もっと深く徳の中に踏み込んで行くのを引き止めているのだ。こんなところから推察されることは、彼女は、ジェロームとの結びつきよりも、むしろ、自分を犠牲にして神の魂にもふさわしいと思われる彼の魂を、より主に近づけようとしていることである。つまり彼女はジェロームと自分との間に、直接的な地上的な愛の存在を認めていない。もし、こんな気持ちの今まで彼女がジェロームと結ばれたとしたら、幸福という影像・神の中の彼を見出せたであろうか。

さて、ここで考えなければならないのは、このような生き方をするアリサという人間についてである。彼女は、人間の欲望の醜さを知り過ぎたが為の禁欲的性質と、一面ではエゴイズム的性格を兼ね備えた極めて模範的な人間である。ところで、彼女の性格をこれほどまでに左右している根本のものは何か。それは、作品中にも数多く使用されている「徳」ということは、これこそ彼女自身を左右し、形造っているものに他ならない。この基盤にあるのが厳格な宗教の信仰である結局はそれが悲恋につながったのである。

ぼくはここまで「徳」ということばを不用意に用い正確な理解はしていないかもしれない。しかし作品中では、少なくとも「徳」とは魂の美の形式である。そしてその美を究明するということは、未来の報酬を得ることではないと言っているように思える。

このようなことをぼくが言うのも、作者ジードが、幸福を求めるながらも、それを自分のものとしなかったアリサの徳主義からくる矛盾に懷疑的な否定をしていると考えたからである。つまりぼくには、ジードが、自分の背徳的な生活とは裏腹に、アリサの徳主義的な生活を強く描き出し、その両方をもつれ合わせること

によって、アリサの極限的な美しさ・徳の美しさの結末からくる瞬間的な無常観を、感動とは別に、ぼくたち読者に考えさせているように思えたのである。

「人形の家」について

1 E 西 牧 均

この物語は、
弁護士メルヘル一家がより
幸福になろう

とする矢先に、妻ノラが1人の人間として生きるために幸福な一家を捨ててるという筋である。彼女が出ていった時のメルヘルの惨めな姿が私の目に浮かぶ。私には彼の気持ちがわかるような気がする。今まで愛していたはずの妻には去られ、あとには子供が3人も控えている。私はノラのことよりもメルヘルの立場に同情したのだ。ああいとも簡単に子と夫を捨てられるものかと。

どうしてノラはそれほどまでの決心をして出て行ったのか。私には、ノラがうって変わって見えたのだ。時には娘気分まるだしだったノラ。夫に甘え子供を優しく見守っていたノラがあんなことをするとは。しかし長い間、父親にそして夫にと彼らに思い通りにさせられた（思い通りにさせたのかもしれないが）ノラの心中には、彼らの考えとは違ったものがつむり積もっていたのである。それがたまたま事件を契機に飛び散ったのである。そして彼女は気付いたのだ、メルヘルの心に。自分を可愛がって慰みにしていただけのメルヘルに。彼の愛は真実ではなかったのだ。メルヘルはこう言った。

「ノラ、わたしはときどき思うんだがね。恐ろしい危険がお前の身に迫ってきて、そのために、わたしが命も財産も何もかも投げ出して、お前を救うというようなことにでもぶつかってみたいと思うんだ」と、しかし、事実その恐ろしい危険がノラの身の上に降りかかったとき、メルヘルはごういい放ったのだ。

「ノラ、お前のためならどんな心配も苦しみもたえ忍ぶ。しかし、いかに愛する者のためとはいえ、名誉を犠牲にする者はないぞ」

と。彼は《命も財産も何もかも投げ出す》ことはできなかった。まったく身勝手ではないか。彼女はこんなメルヘルに気付いたのだ。そして自分が人形だったことも。そんなノラだから、彼女が家を捨てたのは当然起こるべくして起こった仕方のないものかもしれない新しく人生を出発するノラに幸あれと、ひとまず私は拍手を送る。

だが、まだ私には子を捨て夫を捨てたノラの行動をいいことだと言うわけにはいかない。ノラにいかなる理由があったにせよ、家を出していくことは3人の子供たちを悲しませることではないか。母の愛とはこんな程度か。それとも、家庭を捨てたノラの行為のよしあ

しを考える以前に、彼らの社会と父や夫がノラに接していた態度について考えねばならないのだろうか。ノラが1人の人間として認められもあつかわれもしなかったことが、ひいては女性の権利を認められないというところにつながるのであろう。はたして、人間として生きるということと、母親として生きるということとは、次元を別にして考えるべきであろうか。

「金閣寺」について

2 M 目 黒 乙 彦

金閣寺焼失
について、一
般に「永遠の
美に対する憎
悪から放火した」といわれる問題を私なりに主人公の
精神面、特に美意識の点からとらえてみたい。

「私」の中で実物の金閣と心象の金閣は一体とならずに併存し続ける。太平洋戦争のさなか「私」は金閣が不安によって建てられた建築と考える。そして戦乱の不安や多くの屍と夥しい血が金閣の美を増すように感じたのであった。私はここでまず「私」の狂人性を感じとる。「私」は実物が悲劇的な美しさによって心象の金閣を征服させたと言う。金閣に対する美意識を実物のそれが悲劇的な美しさによって「私」の中で増大し独占したのであろう。

やがてその不安が去った時、再び二つの金閣は対等となる。美意識がなぜ自ら金閣を焼くまでに至らせたか。私は先の悲劇的な美しさを求める心を根底としてしばしば「私」の人生を遮断する金閣を目の前から取り除きたかったのだろうと思う。しかし人生を遮断したのは心象の金閣であり、実物を破壊したと妨害物は取り除けぬのではないか。さらに追究してみよう。

「私」は突然に出奔する。その出奔の原因は老師との違和感が最も大きかったが、それに加えて美的観念から逃げだしたい欲求があったと思う。その最中に金閣を焼く決心をする。この決心はふと「私」の頭に浮かんだ考えて、順序だてに論理の展開はなかった。ここで「私」の心の奥に何かその決心を与える根底となるものが、「私」の中に育っていたに違いない。それは次に「私」自身がその決心について思考するところから判ってくる。

「私」はなぜ出奔の原因の老師を殺そうとせず、金閣を滅ぼそうと思ったかを思考する。それは老師を含めた人間に無力を感じ、その無力の根源が金閣にあるものと思ったのである。そしてまた金閣の厳密な一回性を悟る。「私」は全く奇妙な思考をする。「生」あるものは厳密な一回性をもたない。金閣の不壊の美しさから、却って滅びる可能性があると言うのだ。なるほどと納得できる。しかし、これはあくまで狂人的思考である。また、この厳密な一回性と先の悲劇的な美しさは一致しないのではないか。厳密な一回性と悲劇性

は関連はするが、「私」にとっては関係なかったと思われる。「私」は過度に厳密な一回性にとらわれていた。あるいは悲劇性が決心の母体となったとも考えられないことはない。とにかく、先の悲劇的美しさを求める心は、放火の時点では「私」の中の本当に小さい

存在だったにちがいない。放火の想念の根底は金閣の厳密な一回性であると考える。

やがて「私」は独特の狂人的思考で、想念の正当化を積み重ね、「世界を変貌させるのは行為」という信念のもとに、仮想に金閣を炎上させる。

〈資料〉 読書アンケート集計 (中間発表) 回答率82.1%

A 読書することを意義あると認めますか

イ 認める	562	89.3
ロ 認めない	25	4.0
ハ わからない	42	6.7
a 上の間に口と答えた人は次のうちより選んで下さい。	(25)	4.0
1 読書より行動が優先するから	13	52.0
2 読書よりものの思考が大切だと思うから	8	32.0
3 読書以外にもラジオ・テレビの話などで必要な知識は得られるから	2	8.0
4 その他	2	8.0

B 読書は好きですか 嫌いですか

イ 好き	343	56.4%	生まつつき	170	49.6
			動機があつた	172	50.1
ロ 嫌い	59	9.7%	生まつつき	50	84.7
			動機があつた	6	10.6
ハ どちらでもない	206	33.9%	生まつつき	131	63.6
			動機があつた	35	17.0

c それは生まれつきですか それとも動機がありますか

イ 生まれつき	351	57.7
ロ 動機があつた	213	35.0

b Bでイ aで口と答えた人は好きになつた動機を思い出して下さい

1 先生の影響	25	15.3
2 親類や親戚の影響	22	13.5
3 友人・先生等の影響	74	45.4
4 図書館で最初に読んだものに感銘をうけてから	42	25.8
5 その他	5	3.0

c Bでロ aで口と答えた人もその動機を思い出して下さい

1 先生の影響	1	33.3
2 親類や親戚の影響	1	33.3
3 友人・先生等の影響	1	33.3
4 人から勧められたりして読んだものに絶望してから	1	33.3
5 その他		

C 教科書・参考書以外に費やされる読書時間は1週間に何時間くらいとっていますか

イ 0~1	110	17.7
ロ 1~2	99	15.9
ハ 2~3	116	18.6
ニ 3~4	113	18.2
ホ 4~5	71	11.4
ヘ 5~6	37	5.9
ト 6~7	24	3.9
チ 7~	52	8.4

D 読書時間が少ないと考えている人は 次のうちより理由を選んで下さい。とくに1つは限ります

1 学校の勉強に追われる	179	33.8
2 クラブ活動に追われる	120	22.7
3 アルバイトに追われる	27	5.1

4 読書以外の開心事に追われる	186	35.2
5 通学時間にとられる	17	3.2
6 その他		

E 1ヵ月の小遣りの中で図書費は何パーセントくらいしめていますか

すく	(622)	98.0
イ 0~10	206	33.1
ロ 10~20	198	31.8
ハ 20~30	100	16.1
ニ 30~40	44	7.1
ホ 40~50	31	5.0
ヘ 50~60	21	3.4
ト 60~70	6	1.0
チ 70~	16	2.6

F 自分の読書傾向をかえりみたとき、次のうちの主としてどれに該当しますか

1 人生・哲学及び宗教的なもの	119	13.7
2 政治・経済・歴史等社会科学的なもの	48	5.5
3 自然科学的なもの	73	8.4
4 工学技術的なもの	54	6.2
5芸術的なもの	30	3.4
6 外国文学	207	23.8
7 日本文学	200	23.0
8 マンガ(特にどの作家のものか)	140	16.1

H あなたがもっとも落ちついで勉強できるところはどこですか

1 自宅	320	54.7
2 宿または下宿の自室	172	29.4
3 図書館	44	7.5
4 教室	49	8.4
5 その他		

I あなたの本校図書館利用の仕方は次のうちどれですか

(但し、談話室、ゼミ室等は考慮に入れないものとする)	(597)	94.0
1 本を借りて帰り、閲覧室も利用する	224	37.5
2 本を借りて帰るが、閲覧室は利用しない	(172)	28.8
2せなら イ 閲覧室には人がいて落ちつけないから	73	42.4

ロ クラブ活動などで時間がないから	54	31.4
ハ 読みたい本が閲覧室にないから	16	9.3
ニ 通学距離が遠いから	16	9.3
ホ その他	13	7.6

3 本は借りないが、閲覧室は利用する

閲覧室利用の目的は イ 紹介閲覧のため	121	60.2
ロ ただ勉強の場として	80	39.8

ハ その他

1 読みたい本は、本校図書館にありますか	(565)	89.0
2 大体そろっている	148	26.2
3 あまりない	287	50.8
4 ほとんどない	130	23.0

J あなたが図書館(談話室等は除く)を特に利用する時間はいつですか

1 曜休み	311	50.6
2 放課後	168	27.3
3 授業のあいま	40	6.5
4 自習時間	96	15.6

新着図書目録

*印は図書館、他は各教官の
研究室に所在

総 記

日本の名著17集	中央公論社
同22 杉田玄白、平賀源内、司馬江漢	同
楠山春樹 深南子 中国古典新書	明徳出版社
日野開三郎 五代史	同
本居宣長全集 第7巻	筑摩書房
世界の名著56マンハイム、オルtega	中央公論社
朝日新聞編刷版 46-3	朝日新聞社
長沢雅男 参考調査法	理想社
国際十進分類法索引	日本ドクマ
福沢諭吉全集 第13巻	岩波書店
同 第14巻	同
同 第15巻	同
同 第16巻	同
同 第17巻	同
同 第18巻	同
世界年鑑 1971版	共同通信社
開発局	
日本新聞年鑑 昭和45年版電通	
福沢諭吉全集 第19巻	岩波書店
現代学問のす	
すめ研究会 学習の設計	雄渾社
出版年鑑編集	出版ニュー
部 出版年鑑 1971	ス社
大日本百科事典17	小学館

哲 学

岩波講座 哲	
学7 哲学の概念と方法	岩波書店
増谷文雄 仏教の思想10	角川書店
鈴木大拙全集 第30巻	岩波書店
アリストテレス全集1	同
鈴木大拙全集 別巻1	同
日本思想大系	
6 源信	同
同10 法然、一遍	同
日本思想大系	
14 日蓮	同
同25 キリストン書、排耶書	同
同34 貝原益軒 室鳩集	同
同42 石門心学	同
同51 国学運動の思想	同
同11 観葉	同
秋月龍溪 謹鉢木禪学と西田哲学	春秋社
茂原昭男 アウグスティヌス 儒理思日本基督教	
想の研究	同出版局
ヨーロッパ、キリスト教史中央公論社	
I. II	

岩波講座・哲

学6 自然の哲学	岩波書店
同8 存在と知識	同

歴 史

角田文衛 王朝の映像	東京堂出版
岩波講座・世	学習研究社
界歴史27 現代4	岩波書店
田辺健一 都市と国土2	慶應研究所
出版会	河出書房新社
アルバート	河出書房
シェペール ナチス狂気の内幕	鏡光新聞社
大根伸 ルネサンス文化の研究	清水弘文堂
山鹿誠次 都市地理学	大明堂
森岡謙二郎 地形図に歴史を読み	古今書院
飯塚浩二 北緯79度	講談社
日本の文化地理18	古今書院
日本と世界の歴史21	学習研究社

ブルバキ ブルバキ数学原論 代数1	東京図書
同 同	同 2同
同 同	同 3同
同 同	同 4同
同 同	同 5同
同 同	同 6同
同 同	同 7同
同 同	位相1同
同 同	同 2同
同 同	同 3同
同 同	同 4同
同 同	同 5同
狩田勇雄 热力学	我書房
黒沢誠 热力学概論	成山堂書店
鬼頭史城 热流体の数学	コロナ社
Lynn H. L. An Introduction to Abstr D - Van - oomis - act Harmonic Analysis Nostrand	
N·Ja·Vile Special Functions and American - nkin the Theory of Group Rep Mathemati - -resentations	
C·Caratheo Calculus of Variations Holden-D - dory and Partial Differential ay	
Equations of the First Or der Part II	
Lars·Harm Linear Partial Differen Springer - ander - tal Operators	
A·N·Tycho Partial Differential Equ Holden-D - nov - ations of Mathematical Physics Vol II	
Jerald D·Pa Introduction to Fluid Work - er Mechanics and Heat Tra esley - nsfer	
アーマルクシ	
エビイチ 級数	東京図書
G·ボリヤ いかにして問題をとくか 丸善	
同 数学における発見はいかに同 なされるか I 堤納と類比	
同 II 発見的推論	同
梅幸男 無限級数入門	朝倉書店
林巖雄 原子核実験ニレクトロニク横書店	
武田進 ブラズマの基礎	朝倉書店
無谷寛夫 真空の物理と応用	我書房
I·S·Sokol Mathematics of Physics McGraw - nikoff and Modern Engineering Hill	
中村伝 統計力学	岩波書店
富山小太郎 力学	同
中村卓正 日本の0メートル地帯	東京大学出 版会
泉信一 数学公式 附函数表	共立出版
研究情報セン	研究情報セ
ター 公害・水資源編 第1巻	ンター
Jan N·Sme ddon 特殊函数入門	丸善
前田憲一 電磁波動論	オーム社
高木貞治 近世数学史誌	共立出版
A·Cohen コーエンの微分方程式	森北出版
O·Veblen ヴェブレンの位相幾何学	同
玉虫丈一 岩波理化学辞典	岩波書店
春日屋伸昌 新編 数値表	宇航社
鬼頭史城 热流体の数学	コロナ社
和田八三久 高分子の固体物性	培風館

自然 科 学

Lawrence E · Nielson 高分子の力学的性質	化学同人
二宮信幸 ポテンシャル論	共立出版

岡本義三	地盤技術者のための振動学	東京大学出版会	第二港湾建設	第二港湾建設局	不二越油圧研
P.G.ホーエル	改訂版 初等統計学	培風館	小名浜港工事事務所	小名浜港工事事務所	丸グループ 知りたい油圧 基礎編 同
佐藤良一郎	数理統計序説	同	同	小名浜港におけるエプロン同	同 同 応用編 同
船山良三	誤差と最小2乗法概論	理工図書	連続R.C部材の設計施工	港工事事務所	機械の基礎編 同
矢野健太郎	リーマン幾何学入門	南北出版	横浜調査設計	横浜調査設計	委員会 新版 機械の基礎 高田勇次郎 新版 電気機器 I II
マルティン・	自然界における左と右	紀伊国書店	小名浜港設計計算書(その1)計画書	小名浜港設計計算書(その1)計画書	理工学社 東京電機大学出版社
カーダナー	テソル解析の応用	店	同 (その2)	同	石橋弘毅 石油精製と石油化学
秋山守雄	新しい微積分 I II III	南北出版	同 (ケーランカード)	同	山田省二 石油と石油化学
E.E.モイヤズ	行列論	同	同 第1埠頭-10m埠頭岸	同	山田治一 石油精製
遠山啓			第2埠頭-10m埠頭岸	W.W.Ecken Biological Waste Treatment	Pergamon Press
			西防波堤	L.M.Milne Plane Elastic Systems	Springer-Verlag
鶴丸四三二	ベクトル	同	同 3号埠頭第1埠頭(-10m)同	John K.R. Rice	Holt-Rinehart & Winston
福原廣州雄	新数学通論 I II	同	2号埠頭 (-4.5m)	Introduction to Computer Science	新星社
柴田敏男	数学序論	同	西防波堤	横尾武夫 材料力学	岩波書店
小林幹雄	数学公式集	同	小名浜土質調査台帳	青木弘 工業力学	美賢堂
J.N. Fujii	新しい基礎数学	同	小名浜土質調査報告書	同	南北出版
石黒浩二	光学	同	3号埠頭-4.5m埠頭場	前沢成一郎 非線形常微分方程式	ダイヤモン社
高木貞治	数の概念	岩波書店	4号埠頭-4.5m埠頭及び5号埠頭先端	田中一 コンバイラム	南北出版
寺沢寛一	自然科学者のための数学概論	同	3号埠頭 4バース (-10m)埠頭	J.H. Leffel 真空度測定法	産業開発社
	論 应用編		西防波堤	有馬孝 材料力学 (上、下)	パワー社
同	自然科学者のための数学概論	同	2号埠頭、3号埠頭、同	岡本義三 材料力学通論	東京大学出版会
	論 増訂版		-5m埠頭、ケーランカード		
末綱忠一	数学の基礎	同	同 3号埠頭、4号埠頭、同		
高木貞治	解析概論 改訂第三版	同	西防波堤		
本郷均	ベクトルとテンソル	至文堂	第二埠頭地区、第一埠頭同		
有山正孝	振動・波動	裳華房	埠地区		
岩堀長慶	ベクトル解析	同	港内地区、西防波堤地区		
竹内洋一郎	熱応力	日新出版	同 西埠頭、中央埠頭 同		

工 学

運輸省第二港	運輸省第二	運輸省第二	第32回講習会 最近の自動同	C.R.Wylie Advanced Engineering Mathematics
河港建設局小名	港湾建設局	小名浜港工事事務所	機械システム	Hill
浜港工事事務所	小名浜港工事事務所	小名浜港工事事務所	第32回講習会 機械技術者同	建築学大系 2 都市論 住宅問題
同 小名浜港の波浪解析	小名浜港の波浪解析(資料編) 同	坪井英美	のための高分子材料	鶴見国社
同 小名浜港の風と波 (1958.4~1964.3)	同	超小型コンピュータ入門 オーム社	第15回国材強度と破壊国内日本金属学会	南北出版
同 小名浜港の風と波 (1965.4~1967.3)	同	石橋正	総合シンポジウム論文集	益田貞治
同 港湾工事における波浪予測	同	坪井英美	昭和13年工場統計表	谷村功
同 小名浜港における波浪干渉の現況	同	石橋正	金属性の疲労と破壊の防止	渋谷茂一
同 小名浜港の波向 (1958.4~1965.3)	同	美城大学工学部機械工学実験室	基礎研究会	マイクロウェーブ伝播解説コロナ社
同 小名浜港におけるレーダーによる波向解析	同	研究所会 構造機械工学実験法	理工団書	Kenneth Davies
同 小名浜港の波向解析	同	大造寺達	内燃機関原論	電磁界電波伝播
建設工学研究	建設工学研究会	柳原茂	丸善	同
振興会 小名浜港遮蔽実験報告書1完編	小名浜港遮蔽実験報告書1完編	坪井英美	自動車公害とその対策技術ナツメ社	小川博三
同 小名浜港西防波堤沈下実験同	報告書	石橋正	基礎力学	記念碑都市
同 根据め方塊の安定に関する同	根据め方塊の安定に関する同	井上謙	ポンプ水車の特性	庄司光
同 実験報告書		石井安男	水車	賀敷
運輸省第二港	運輸省第二	三宅清司	産業の基礎技術	上水工学
河港建設局浜港	河港建設局	新機械工学	朝倉書店	吉田高年
調査設計事務所小名浜港三崎地区	調査設計事務所	監査委員会新機械工学便覧	理工団書	共立出版
所 報告書	計画書	黒田正夫	金属鍛造鏡	技術評論社
		池谷武雄	水力機械 I	井川治男
		木村恒行	公害の理論	チモシェンコ材料力学 上
		中島高正	自動設計	東京図書
		井上謙	特殊加工法	池谷武雄
		稻田重男	機械構造演習	水力機械 II
		沢田潤雄	機械基礎の設計と選定	東京電機大学出版局
		ジャパンマシニスト社編集	九善	吉田隆
		ニスト社編集	同	自転車の氣化器
		部	同	高松英次
		曲車	機械ハンドブック、アイテ技術評論社	ア設計
			三木鉄夫	航空宇宙工学概論
			川・M・カチャ	ノフ
			信原泰夫	塑性理論の基礎
			同	コンピュータによる構造工
				学講座 I - 2
				培風館

コットレル	コットレルの金属学 (F)	アグネ社	山崎博也	構造力学II	同	同	同 Guidebook	同
Erich-G-T	金属塑性加工の力学	コロナ社	杉田乾	現場で役立つ機械設計の勘	同	同	Using Latin 2	同
J-hansen	金属性加工の力学	コロナ社	川口寅之輔	どころ	日刊工業	同	Translation Key	同
月 M-C	塑性理論の基礎	美賢堂	稻生有年	材料科学入門	同	同	Guidebook	同
ノフ	塑性理論の基礎	美賢堂	稻生有年	実用機械力学	同	同	Using Latin 3	同
W-Hume-R	機械工学基礎論	アグネ社	山本福一	機械機械学	同	同	Guidebook and Translat	同
O-berry	機械工学基礎論	アグネ社	中山正和	技術者の創造性開発と訓練同			-ion Key for Using La	
浦昭二	センブリ書譜	培風館	小島良男	水処理のための生物試験の月刊「水」見			-tin 3	
A-Kelly	複合材料	丸善	手引き	行所	同		Exercises in Writing	同
西村源六郎	機械工学	誠文堂新光社	島井正一郎	現代建築論	筑摩書房	同	Latin for Using Latin 3	同
Iain Finni						同	Tests and Practice for	同
・	工業材料のクリーブ	コロナ社					Using Latin 3	
A-M-Freud	工業用材料と構造物の非弾					John Dixon	Growth through English	Oxford
Centhal	性運動	同				F-G-Freud	English in Tables	同
R-E-Small				世界の美術館				
・man	金属材料の基礎	同	36	フリーラ美術館II	講談社	※	Common Errors in Engli	同
森口繁一	工学部の研究と教育	東京大学出版会	現代保健体育		大修館	聖部四郎	-sh	言語の系統と歴史
岡本義三	材料力学論	同	学大系20	疾病学	講談社			岩波書店
吉澤義夫	機械技術者のための振動学オーム社		現代の美術2幻想と人間	浮世絵13	毎日新聞社			
	構造工学研究	東京大学出版会	松金	役者松田	光潮社			
長谷研究委員会								
会	弹性安定要覧	コロナ社						
Y・ギラ	P C 不静定構造物の設計	共立出版	L-G-Alexander	First Things First	Longman	※	現代日本文学	
橋本義夫	実用プレストレストコンクリート		同	Developing Skills	同	※	大系8	森鷗外集(二)
リード・要覧		山海堂	Hans-Kurat	A Word Geography of the	Ann-Arbo		同25	与謝野晶子、上田敏、木下空太郎、吉井勇
春日尾伸昌	応用力学例題演習1	コロナ社	・h	The Eastern United States	・r			小山内農、長田秀雄、平出修業
金井清	地盤工学	共立出版	・ales.					
土木学会岩盤土木技術者のための岩盤力			Joseph Wright	The English Dialect	Oxford			
力学委員会	学	土木学会	・ight	Grammar				
堤松和夫	土木構造物の調査試験法	理工図書	高橋正武	西和辞典	白水社			
リチャード・格子桁と直交異方性板の計			ジョルジエ	フランス基本語辞典	同			
バレシ	算	共立出版	マトレ	国語音韻論	笠間書院			
島田貞夫	たわみ角法による交差面構		馬場和夫	C-W-E-Peacock	Scott-Fox			
造の解法			・principia	Principia Latin I	resman			
C・T・ワン	応用弹性学	森北出版	同	Teacher's Manual for P	同			
石井博	真空ポンプ	日刊工業	・pseudolus Noster					
同	真密度測定	同	同	Latin 2				
浅尾在一郎	真空技術用構成材料	同	同	Teacher's Manual for P	同			
中川洋	真空装置	同	・seculous Noster,					
林生税	超高真空	同	Annabel Ho	Using Latin 1	同			
真空技術専用			・rn					
諸表編纂委員会	真空技術常用諸表	同	同	Translation Key	同			
益田義治	入門光弹性実験	同						
中川有三	塑性学	共立出版						

あとがき

先日、学生図書委員の諸君の協力によって読書調査を行なったが、82%という好回収率であった。本号ではとりあえず客観的記入の部分だけを発表したが、記述式の部分は整理の出来次第発表する予定である。

この資料をみて気づいた点をあげてみると、「読書は好き嫌いか」で、「どちらでもない」が約34%を占め、「読書時間が少ない」で、「読書以外の関心事に追われるため」が約35%あったことである。彼等が読書という美果の味を十分に知っていないのは、残念というか、氣の毒を感じである。

次に「読書傾向」では、1位外国文学、2位日本文学、3位マンガ、4位人生・哲学・宗教と並んだことは、現代青年の一般的傾向を示しているが、工業高専生としての特徴がどこにあるのか、となると難問である。ともあれ、いづれ他校とも比較して最終結論を出すつもりであるが、学生諸君も自分の問題として考えておいて欲しい。

(芋川)